

内的聴覚を育む音楽科教育

—授業内容と生徒の日常生活を縫い合わせる 「音楽アクティビティ」実践の考察—

教育実践高度化専攻 教科指導重点コース 造形・創造科学系（音楽）

矢和田 萌々

本研究は、義務教育に音楽科教育が存在する意義を考えることから始まる。存在意義を明らかにするためには音楽科ならではの感性や創造性を育む方法が必要であると考え、美術科にはない「聴く」という音楽特有の感覚を基にした「内的聴覚」を育むことを目標に、生徒の豊かな感性を引き出すための原体験となる「音楽アクティビティ」を開発し、その手だての有効性を検討した。「音楽アクティビティ」とは、音や音楽で遊ぶ経験を通して、授業内容と日常生活を縫い合わせていく活動である。実践にあたり、関係諸理論および先行研究で遊びを学びの基盤とする意義や内的聴覚を育む意義を裏付けるとともに、学校現場での実現可能性を高める手段として“授業書”の研究も進めた。

実践の結果、生徒は、生活や社会の中にある音や音楽に内的聴覚をはたらかせられるようになり、「音楽」を主体的に捉え創造的に再定義するようになった。これは文部科学省『中学校学習指導要領』で示されている音楽科の教育目標にも通ずる。

今後の課題は、年間指導計画のなかで「音楽アクティビティ」をどのように構成し位置づけ、その実現可能性を高めていくかという点にある。